



徳島県におけるオオムシクイの秋期の渡り

籠島恵介

宮城県仙台市泉区上谷刈 5-26-16-102

はじめに

メボソムシクイ上種 *P. borealis* pl. は、オオムシクイ *Phylloscopus examinandus*, メボソムシクイ *P. xanthodryas*, 及びコムシクイ *P. borealis* の3種により構成される。オオムシクイはサハリンやカムチャッカ半島、千島列島及び、北海道知床半島で繁殖し、東南アジアに渡り、越冬する（日本鳥学会 2012, 齋藤ら 2012）。

本種は春の渡り時期には囀りを行うが、囀りは比較的識別が容易なため日本でも多くの記録がある。例えば、藤巻（2021）は北海道における観察記録を包括的にとりまとめ、低地では5月終わりから6月半ばにかけて通過としている。高山（2020）は北海道旭川市における2017年から2020年にかけての観察で5月終わりから6月初めによく確認されるとしている。神奈川県三浦半島では1982年から2012年の春期の観察で最も早い記録は5月21日でもっとも遅い記録は6月8日としている（宮脇 2013）、また、宮城県仙台市では2022年に6月1日から11日までの間確認された（籠島恵介 個人観察）。

しかし秋期には本種は囀らないため、春に比べて通過時期や渡りルートの情報について文献化されたものは少ない。今西ら（2009）はメボソムシクイ上種が長野県野辺山で8月中旬から11月上旬まで捕獲されたこと、兵庫県六甲山では9月上旬から11月上旬まで捕獲されたことを報告しているが上種内の3種の識別は困難である。大西（2014）は本種が9月中旬から10月中旬によくみられるとしている。

難である。大西（2014）は本種が9月中旬から10月中旬によくみられるとしている。

本上種内の形態上の差異は僅かであり外観的には識別困難である（Cramp 1992）。メボソムシクイの雄成鳥についてはP10の初列雨覆からの突出で識別できるとされる（齋藤ら 2012）が、野外観察で確認することは困難である。

Alström ら（2011）は、当該上種内の3種の地鳴き音声进行分析し、音紋による識別が可能であることを示している。筆者はこれらに基づき秋期に徳島県阿南市で地鳴きを録音して音紋を作成し、オオムシクイの通過時期及び個体数を確認した。

調査方法

調査地は徳島県阿南市那賀川町刈屋的那賀川町出島野鳥園の北東に位置する水路沿いの歩道及びその周辺である（N33.960 E134.674）。水路は紀伊水道に面した海岸線から約百m離れており、平行して直線的に1km弱の長さで存在する。低木及び草本類が繁茂しており、なかでもノイバラ *Rosa multiflora* が密集していて秋期には液果が熟している。

2015年は10月11,12,17,24日に調査した。2016年は9月17,24日及び10月1,9,15日に調査した。それぞれの調査日に午前9時から午後10時までの約1時間、水路沿いの歩道を往復してメボソムシクイ上種を調査した。

メボソムシクイ上種の地鳴きはいずれも短い

2022年9月16日受理

キーワード：オオムシクイ、音声、秋期渡り、四国、徳島県



図 1. 調査地

Fig. 1. Study site

濁った音である。このような音声を聞き取った場合、すぐ録音し、目視できれば望遠レンズ (500 mm) を装着したカメラで撮影を行った。録音機はオリンパス社 PCM レコーダー LS-10 を使用した。

録音した音声は、個体ごとになるべく明瞭な音節単位をフリーソフト Audacity で切り出した。サンプリング周波数を 20,000 Hz まで落としてノイズを少なくし、モノラルにした。音が小さい場合には増幅して適切な大きさにした。これをフリーソフト Raven で読み込み、音紋を視覚化し、複数のサンプルから明瞭なものを選んでその波形を調べた。

齋藤ら (2012) は 3 種の地鳴きについて以下の特徴を上げているため、これらを参考にした。

1. コムシクイの地鳴きは、シャープで濁っており、「ビツまたヴィ」と 1 音発するか、「ビビツ」と 2 音発する。
2. オオムシクイはコムシクイよりもシャープさがなく、よりゆっくりで長く、音要素間は間隔が空いており、その周波数帯は広い。
3. メボソムシクイは、他の種よりも周波数が低く、周波数帯は狭く、シャープさに欠け、

ザラザラと擦れるような音。

Alström ら (2011) の音紋図および齋藤ら (2012) からは、オオムシクイの音紋は縦に割れており、周波数帯は下限が 2-4KHz、上限は 7-8KHz と読み取ることができ、コムシクイの 4.5-7KHz 及び、メボソムシクイの 2-5KHz より幅が広いと考えられた。参考を図 2 に示す。

結果

2015 年 10 月 24 日、2016 年 9 月 17 日、10 月 9,15 日には確認できなかった。

2015 年は 4 日調査して 3 日、メボソムシクイ上種を音声または目視にて確認した。2016 年は 5 日調査して 2 日確認した。全調査日を通じて地鳴きを聞き取ることができたのは 12 個体である。いずれも濁った分裂した音を聞き取ることができたので、すべてオオムシクイであると考えられた。そのうち地鳴きを録音できたのは 7 個体で、音紋によりオオムシクイと判断したのは 5 個体 (表 1) である。

筆者が録音した 7 個体のうち 2 個体については波長範囲が不明瞭であったが、その他の 5 個体について周波数は最低値が 2-4KHz、最高

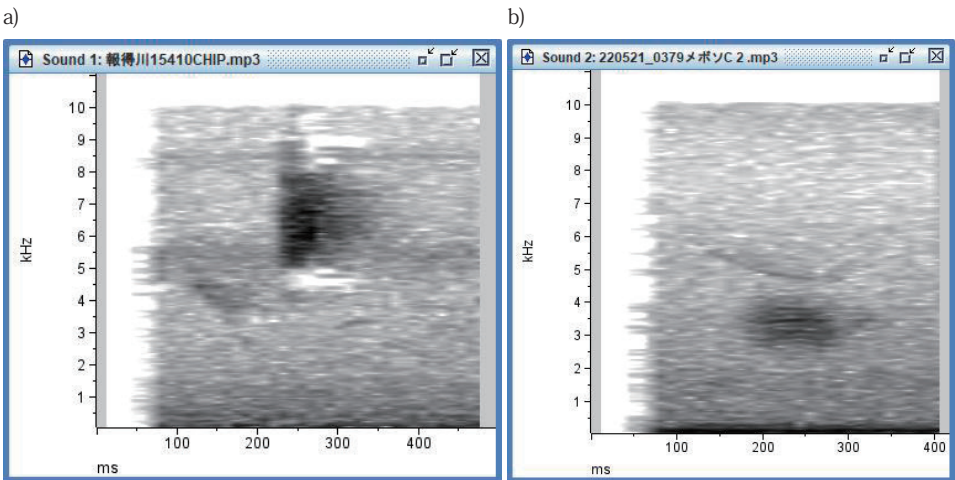


図 2. 他のメボソムシ上種の地鳴きの音紋との比較. a) コムシクイ (左図) 2012 年春期 (日付不詳), 沖縄県糸満市報得川で大城亀信氏が録音. 目視によりメボソムシ上種であることを確認した個体の地鳴き. 音は 5 kHz 以上で短く, 再生するとビッと聞こえる. b) メボソムシクイ (右図) 2022 年 5 月 21 日岩手県宮古市早池峰山で筆者が録音. 囀りで本種であることを確認している個体の地鳴き. 音域が低く 2–4.5 kHz で, 再生すると粘りがあるような感じがする.

Fig. 2. Reference of soundspectrogram of other species calls of *P.borealis* pl.. a) Call of a *P. borealis* recorded by K. Oshiro on the Mukue River, Itoman City, Okinawa Prefecture, southern Japan in the spring of 2021 (left panel). This individual was visually confirmed to be *P.borealis* pl.. The sound is short, above 5 kHz, and can be heard "vit". b) Call of *P. xanthodryas* recorded by the author at Mt.Hayachine in Miyako, Iwate Prefecture, northern Japan on in May 21, 2022 (right panel). This individual was identified as the species based on its song. This call which sounds somewhat persistent has a frequency range of 2–4.5 kHz.

表 1. 筆者が徳島県で秋期のメボソムシ上種の地鳴きを確認した日
Table1. Date when the author confirmed the calls of an Arctic warbler pl. in autumn at Tokushima Prefecture

個体番号 No.	観察年 Year	観察月日 Date	録音 Record	波長範囲 Frequency (kHz)	音紋形状 Spectrogram	濁った地鳴き Call note "zit" (聴覚)	目視または 撮影 Observation
1	2015	1011	無			○	
2	2015	1012	無			○	
3	2015	1012	有	2–7	分裂	○	
4	2015	1012	有	3–9.5	分裂	○	目視・撮影
5	2015	1012	有	不明瞭	不明瞭	○	
6	2015	1012	有	不明瞭	不明瞭	○	
7	2015	1012	無			○	
8	2015	1017	無			○	目視
9	2016	924	有	4–8.0	分裂	○	
10	2016	924	有	4–7.5	分裂	○	
11	2016	1001	有	3–7.5	分裂	○	

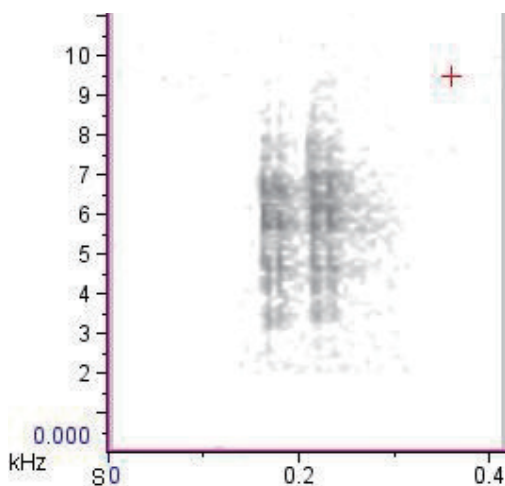


図3. オオムシクイの地鳴きの音紋（2015年10月12日）。4つのパーツに分かれており、第2節と第3節の間に明瞭なブランクがある。音域は3kHzから9.5kHzまでの広い範囲に及んでいる。

Fig.3. Sound spectrogram of a call of the Kamchatka Leaf Warbler (Oct. 12, 2015). The Call splits into 4 parts with a distinct blank was between 2nd and 3rd syllables. Frequency ranged from from 3 to 9.5 kHz.

値が7-9.5 kHzまでと広範囲であり、音紋が0.05 secの間隔を空け大きく2つに分裂していた（図2）。斎藤ら（2012）に記載された音紋と比較してコムシクイ及びメボソムシクイより明らかに広範囲である（図3）。これらのことから少なくとも5個体はオオムシクイと判断された。

考察

音源が遠く、音が不明瞭な2個体の音紋は、コムシクイに似た狭い周波数範囲になった。音源が遠いと不明瞭な音紋となり、区別が付きにくいことに留意する必要がある。多くのサンプルを取ることを心掛け、最良の音紋を得ることを試み、場合によってはデータとしての採用を断念することも必要である。

なお10月下旬（2015年は10月17日初認、2016年は10月25日初認）に渡ってくるジョウビタキ *Phoenicurus auroreus* の短いジャ、という地鳴きもメボソムシクイ上種に似ているが、音質がはじけるような感じで聴覚でも判定できた。音紋では、上下の周波数に分裂してお

り、低周波音域では広がってJ字型になっていることで明確に判別できた。またジョウビタキは目立つ場所に出てくるため、目視での判別も可能であった。

徳島県南部における通過時期は、音紋による確認ができたケースで最も早い初認は2016年の9月24日、最も遅い終認は2015年の10月12日であった。このことから当地でのオオムシクイは9月下旬から10月中旬に通過しているものと考えられた。詳細については今後の継続的な調査が望まれる。

なお、観察地は、紀伊水道に面した海岸沿いであるが、筆者は香川県飯野山の標高400m地点でオオムシクイと思われる個体（録音せず）を2回確認している（2017年10月8日、2018年10月8日）ため、必ずしも海岸沿いにいるとは限らないと考えられた。

謝辞

日本野鳥の会徳島県支部の方々に情報を提供して頂いた。大城亀信氏にはコムシクイの音声を提供して頂いた。また黒田治男氏及び渡部良樹氏には録音



図 4. 音声で同定されたオオムシクイ (2015 年 10 月 12 日)
Fig.4 Kamchatka Leaf Warbler confirmed by vocalization (Oct.12 2015)

分析の方法を教えてください。感謝申し上げます。

引用文献

- Alström P, Saitoh T, Williams D, Nishiumi I, Shigeta Y, Ueda K, Irestedt M, Björklund M & Olsson U. 2011. The Arctic Warbler *Phylloscopus borealis* – three anciently separated cryptic species revealed. *Ibis* 153: 395–410.
- Cramp, S. 1992. The birds of the Western Palearctic. Vol.6. Oxford University Press, London.
- 藤巻裕蔵. 2021. 北海道におけるオオムシクイの繁殖期の分布. 山階鳥学誌 53: 85–92
- 今西貞夫・小畑義之・村田健・枝田逸裕・岩崎健二・大村尚子, 2009. ムシクイ類3種の秋の渡り時期の違い. 山階鳥学誌40: 96–103
- 日本鳥学会. 2012. 日本鳥類目録改訂第7版. 日本鳥学会. 三田.
- 宮脇佳郎. 2013. 三浦半島におけるオオムシクイ *Phylloscopus examinandus* の記録. BINOS 20: 29–31
- 大西敏一・五百澤日丸. 2014. 日本の野鳥650. 平凡社. 東京.
- 齋藤武馬・西海功・茂田良光・上田恵介. 2012. メボソムシクイの分類の再検討ー3つの独立種

を含むメボソムシクイ上種についてー. 日本鳥学会誌 61: 46–59.

高山裕子. 2020. 北海道旭川の春の渡り期におけるオオムシクイの通過時期. *Bird Research* 16: S7–S9

Autumn migration of the Kamchatka Leaf Warbler in Tokushima Prefecture,
Shikoku, western Japan

Keisuke Kagoshima

5-26-16-102 Kamiyagari, Izumi ward, Sendai city, Miyagi, Japan

Once considered a single species, the Arctic Warbler *Phylloscopus borealis* has been split into three species: the Arctic Warbler *P. borealis*, the Kamchatka Leaf Warbler *P. examinandus*, and the Japanese Leaf Warbler *P. xanthodryas*. Kamchatka Leaf Warbler is breeding at Kamchatka, Sakhalin, Kuril Isl., and Hokkaido (only Shiretoko Peninsula) and migrates south (Saito *et al.* 2012). But the details of the migration route and period in Asia are unknown partly due to the difficulty in identification. I recorded Kamchatka Leaf Warbler's calls in autumn in eastern Shikoku Island from 2015 to 2016 and analyzed them using spectrograms. Calls of 12 leaf warblers were recorded and five of them were confirmed as the Kamchatka Leaf Warbler. I concluded that the Kamchatka Leaf Warbler is a regular passage bird through Shikoku Island from late September to middle October.

Keywords: Kamchatka Leaf Warbler, Shikoku, Tokushima, Vocalization, Autumn migration